

今は昔、春つかた、日うららかなりに、六十ばかりの女のありけるが、虫打ち取りてゐたりけるに、庭に雀のしありきけるを、童部石を取りて打ちたれば、当たり前腰をうち折られにけり。羽をふためかして惑ふ程に、鳥のかけりありきければ、「あな心憂。鳥取りてん」とて、この女急ぎ取りて、息しかけなどして物食はず。小桶に入れて夜はをさむ。明くれば米食はせ、銅、薬にこそげて食はせなどすれば、子ども孫など、「あはれ、女刀自は老いて雀飼はるる」とて憎み笑ふ。かくて月ごろよくつくろへば、やうやう躍り歩く。雀の心にも、かく養ひ生けたるをいみじくうれしうれしと思ひけり。あからさまに物へ行くとても、人に、「この雀見よ。物食はせよ」など言ひ置きければ、子、孫など、「あはれ、なんで雀飼はるる」とて憎み笑へども、「さはれ、いとほしければ」とて飼ふ程に、飛ぶ程なりけり。「今はよも鳥に取られじ」とて、外に出でて手に据ゑて、「飛びやする、見ん」とて、ささげたれば、ふらふらと飛びて往ぬ。女、「多くの月ごろ日ごろ、暮るればをさめ、明くれば物食はせ習ひて、あはれや飛びて往ぬるよ。また来やすると見ん」など、つれづれに思ひていひければ、人に笑はれけり。

さて廿日ばかりありて、この女のゐたる方に雀のいたく鳴く声しければ、「雀こそいたく鳴くなれ。ありし雀の来るにやあらん」と思ひて出でて見れば、この雀なり。「あはれに、忘れず来たるこそあはれなれ」といふ程に、女の顔をうち見て、口より露ばかりの物を落して置くやうにして飛びて往ぬ。「何にかあらん。雀の落して往ぬる物は」とて寄りて見れば、瓢の種をただ一つ落して置きたり。「持て来たる、やうこそあらめ」とて、取りて持ちたり。「あないみじ、すずめの物得て宝にし給ふ」とて子ども笑へば、「さはれ、植ゑてみん」とて植ゑたれば、秋になるままだに、いみじく多く生ひ広がりて、なべての瓢荷も似ず、大きに多くなりたり。女悦び興じて、里隣の人にも食はせ、取れども取れども尽きもせず多かり。笑ひし子孫もこれを明け暮れ食ひてあり。一里配りなどして、果てにはまことにすぐれて大きなる七つ八つは瓢にせんと思ひて、内につりつけて置きたり。

さて月ごろへて、「今はよくなりぬらん」とて見れば、よくなりけり。取りおろして口あけんとするに、少し重し。あやしけれども切りあけて見れば、物一はた入りたり。「何にかあるらん」とて移して見れば、白米の入りたりつ。思ひかけずあさましと思ひて、大きなる物に皆を移したるに、同じやうに入れてあれば、「ただ事にはあらざりけり。雀のしたるにこそ」と、あさましくうれしければ、物に入れて隠し置きて、残りの瓢どもを見れば、同じやうに入れてあり。これを移し移し使へば、せん方なく多かり。さてまことに頼もしき人にぞなにける。隣里の人も見あさみ、いみじき事に羨みけり。

この隣にありける女の子どものいふやう、「同じ事なれど、人はかくこそあれ。はかばかしき事もえし出で給はぬ」などいはれて、隣の女、この女房のもとに来たりて、「さてもさても、こはいかなりし事ぞ。雀のなどはほの聞けど、よくはえ知らねば、もとありけんままにのたまへ」といへば、「瓢の種を一つ落したりし植ゑたりしより、ある事なり」とて、こまかにもいはぬを、なほ、「ありのままにこまかにのたまへ」と切に問へば、「心狭く隠すべき事かは」と思ひて、「かうかう腰折れたる雀のありしを飼ひ生けたりしを、うれしと思ひけるにや、瓢の種を一つ持ちて、来たりしを植ゑたれば、かくなりたるなり」といへば、「その種ただ一つ賜べ」といへば、「それに入れた

る米などは参らせん。種はあるべき事にもあらず。さらにえなん散らすまじ」とと取らせねば、「我もいかに腰折れたらん雀見つけて飼はん」と思ひて、目をたてて見れど、腰折れたる雀さらに見えず。

つとめてことに、窺うかがひ見れば、せどの方に米の散りたるを食ふとて雀の躍り歩くを、石を取りてもしやとて打てば、あまたの中にたびたび打てば、おのづから打ち当てられて、え飛ばぬあり。悦びて寄りて腰よくうち折りて後に、取りて物食はせ、菓食はせなどして置きたり。「一つか徳をだにこそ見れ、ましてあまたならばいかに頼もしからん。あの隣の女にはまさりて、子どもにもほめられん」と思ひて、この内に米撒きて窺ひみれば、雀ども集まりて食ひに來たれば、また打ち打ちしければ、三つ打ち折りぬ。「今はかばかりにてありなん」と思ひて腰折れたる雀三つばかり桶に取り入れて、銅こそげて食はせなどして月ごろ経る程に、皆よくなりたれば、悦びて外に取り出でたれば、ふらふらと飛びてみな往ぬ。「いみじきわさしつ」と思ふ。雀は腰うち折られて、かく月ごろ籠め置きたる、よにねたしと思ひけり。

さて十日ばかりありて、この雀ども來たれば、悦びて、まづ「口に物やくはへたる」と見るに、瓢の種を一つつつみな落として往ぬ。「さればよ」とうれしくて、取りて三所に植ゑてけり。例よりもするすると生ひたちて、いみじく大きになりたる。女、笑みまけて見て、子どもにいふやう、「はかばかしき事し出でずといひしかど、我は隣の女にはまさりなん」といへば、げさにもあらなと思ひたり。これは数の少なければ、米多く取らんとて、人にも食はせず、我も食はず。子どもがいふやう、「隣の女房は里隣の人にも食はせ、我も食ひなどこそせしか。これはまして三つが種なり。我も人にも食はせらるるべきなり」とて、おほらかにて食ふに、にがき事物にも似ず。黄蘗のやうにて心地惑ふ。食ひと食ひたる人々も子どもも我も、物をつきて惑ふ程に、隣の人どももみな心地を損じて、來集りて、「こはいかなる物を食はせつるぞ。あな恐ろし。つゆばかりけふんの口に寄りたる者も、物をつき惑ひ合ひて死ぬべくこそあれ」と、腹立ちて「いひせためん」と思ひて來たれば、主の女を始めて子どももみな物覚えず、つき散らして臥せり合ひたり。いふかひなく、共に帰りぬ。二三日も過ぎぬれば、誰々も心地直りになり。女思ふやう、「みな米にならんとしけるものを、急ぎて食ひたれば、かくあやしかりけるなめり」と思ひて、残りをば皆つりつけて置きたり。

さて月比ごろ経て、「今はよくなりぬらん」とて、移し入れん料の桶ども具して部屋に入る。うれしければ、齒もなき口して耳のもとまで一人笑みして、桶を寄せて移しければ、虻、蜂、むかで、とかげ、蛇くまなはなど出でて、目鼻ともいはず、一身に取りつきて刺せども、女痛さも覺えず。ただ「米のこぼれかかるぞ」と思ひて、「しばし待ち給へ、雀よ。少しづつ取らん」といふ。七つ八つの瓢より、そこらの毒虫ども出でて、子どもをも刺し食ひ、女をば刺し殺してけり。雀の、腰をうち折られて、妬しと思ひて、万の虫どもを語らひて入れたりけるなり。

隣の雀は、もと腰折れて鳥の命取りぬべかりしを養ひ生けたれば、うれしと思ひけるなり。されば物羨みはずまじき事なり。

1 良く知られている「舌切り雀」の「いいお爺さんと悪いお婆さん」の話では、意地悪ばあさんが障子張り替への糊を食べられたので雀の舌を切る罰を与えた。